

氏名	： 小西 美和子
学位の種類	： 博士(看護学)
学位記番号	： 甲第12号
学位授与年月日	： 平成24年6月26日
学位授与の要件	： 学位規則第4条第1項該当
論文題目	： 外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づいた行動の構造化 Structuring circulating nurses' actions based on their forethought toward their surgical patients
論文審査委員	： 主査 野並 葉子 (兵庫県立大学) 副査 片田 範子 (兵庫県立大学) 副査 鵜飼 和浩 副査 佐藤 紀子 (東京女子医科大学)

論文内容の要旨

[キーワード]

外回り看護師、手術患者、先見性、グラウンデッドセオリー

[研究概要]

手術患者は、手術操作と麻酔によりきわめて大きな身体的侵襲を受ける。特に手術中、患者は麻酔によって意識が消失し、呼吸・循環・体温をつかさどる中枢神経の機能が抑制され、生体の恒常性をコントロールされた状態にあり、周手術期の中でも生命力が最も弱い状態にある。そのため術中の医療・看護の目標は、早期回復に向けて患者の体力の消耗や麻酔・手術の影響を最小限にすることである。

手術室看護師の業務には、外回り・器械だしの2つがあり、外回り業務を行うものを外回り看護師と呼ぶ。外回り看護師は、手術患者のおかれている状況を全体的に把握する役割を持ち、手術中、手術室内のあらゆる面に責任を持って管理を行っている。しかし、外回り看護師が患者の手術侵襲を最小限にし、回復を促進するためにとっている行動は、着目されてこなかった。外回り看護師が経験の中から培ってきた実践知は暗黙知として埋もれ、形式知として明らかにされてこなかったと指摘されている。外回り看護師が行っている実践知をより具体的に目に見える形で記述することは、手術看護の専門性、質の向上にとって重要な課題である。

本研究は、外回り看護師が担当する患者に対して手術開始前から手術直後までの間に

手術侵襲を最小限にするために行っている、先見性に基づく行動がどのようなものかを明らかにすることを目的としている。研究デザインは、シンボリック相互作用論を理論的前提とし、グランデッドセオリーの方法論を用いた理論生成の研究として計画されている。

本研究の協力者は、手術室看護の経験が5年以上で日本手術看護学会の「臨床実践能力の習熟度段階」でレベルⅢ・Ⅳおよび日本看護協会手術看護認定看護師としている。外回り看護師が担当する患者は、全身麻酔で手術を受ける、手術侵襲が大きいと予想される手術、出血や血行動態の変動が激しいことが予測される手術を受ける者で、外回り看護師が手術終了後に患者の観察ができるケースとしている。データ収集期間は、2008年8月から2011年1月までであった。データ収集場所は、施設のタイプが異なる兵庫県内の3施設で行っている。データ収集は、研究者が手術室に入室し外回り看護師の行動を参加観察し、手術終了後半構成的質問紙を用いたインタビューにより行っている。データ内容の比較を行いながら、次のデータ収集の対象を選定し、理論的飽和に至るまで、データ収集を行っている。最終的に研究協力者は17名であり、その内訳は男性1名、女性16名で、手術室看護経験年数は5～27年、平均年数は13.4年であった。

結果、手術開始前から手術終了までの間に、外回り看護師が手術患者に対する先見性に基づく行動の構造とプロセスを検討した結果、抽出された86個の一次コードから、25個のサブカテゴリー、9個のカテゴリー（『』で表わす）、3個のコアカテゴリー（【】ゴシックで表わす）が明らかになっている。

外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づく行動の構造には、手術が開始される前、手術中、手術が終了するまでの時間軸において、＜生活体＞＜生命体＞＜生活体＞と変化していく患者の局面を捉え、その移行をスムーズに行い、患者が生活体として手術を受ける前の状態に戻るよう行動する【生活を見通す】コアカテゴリーが横軸にあった。【生活を見通す】コアカテゴリーは、『先手を打つ』『手術の山場を見極める』『守り抜いた生命を繋ぐ』カテゴリーで構成された。外回り看護師は、生活体として入室してきた患者の能力を見極め、手術経過を予測し、段取りをつけ、万全の態勢で手術が受けられるよう『先手を打つ』行動をとり、術前に行ったアセスメントの内容、術中に捉えた術野の状況、出欠に伴う血行動態の変化、術中の術者の会話から『手術の山場を読む』行動へとつなげ、手術の終盤の流れを見極める、患者の生命力が消耗しないよう患者にかわって橋渡しをすることから『守り抜いた生命を繋ぐ』行動をとっていた。

続いて、外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づく行動の構造には、患者の不安や苦痛をわかり、患者に寄り添う『患者に成り代わる』内側の層と、『患者の生命力を見極める』『患者の生命の安全を守り抜く』外側の層を連動させて、【生命の歯車を回す】カテゴリーが外回り看護師の看護ケアの中核にあった。ここでは外回り看護師は、目に見えるものと見えないものを捉え、患者を俯瞰的に見て、それらを連動して患者の生命力を見極め、『患者の生命の安全を守り抜く』ために【生命の歯車を回す】行動を

とっていた。

三つ目に、外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づく行動の構造には、医療者が動きやすい場を整え、医療者の動きをキャッチし、『医療者の間を繋ぐ』軸と、不測の事態が起こっても落ち着いて行動できるよう防御の姿勢で動き、どのような状況でも対処できるよう備える『手術に対して構えてかかる』軸が、手術を円滑に進めるためのリズムを刻む『術者の呼吸に合わせる』軸へと合流して、【医療者を快調にする】行動をとっていた。

考察では、外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づく行動を、「手術開始前から手術終了後の時間軸の中で、局面を捉え、＜生活体＞から＜生命体＞、＜生命体＞から＜生活体＞への移行をスムーズにし、その方向性は生活体としての患者の生活を見通すことにある。また手術を受ける患者に成りかわること、かつ自らの五感と皮膚を通して患者の生命力を捉え、患者の生命の安全を守り抜くことを連動し、患者の生命の歯車を回す加減と方法を見極め、患者の生命の歯車を回す。そして、手術の山場に術者の呼吸に合わせて動くために、場や間を整え、どのような状況でも医療者の動きに応じられるように構えてかかり、医療者を快調にし、手術の流れを円滑にすることである」と定義した。

[審査状況]

1. コアカテゴリー【生命を回す】という言葉が分かりにくい。そのコアカテゴリーがどのように生成されたか説明を求めた。本コアカテゴリーは、麻酔下にある手術患者に対して外回り看護師が患者の皮膚を護り抜く、体温を見張る、目と耳を同期させて出血状況を捉えるなどにより、生命の動力・リズム・循環を回していることを意味していた。そこで、本カテゴリーの表現を【生命の歯車を回す】と変更することを了承した。

2. 外回り看護師の手術患者に対する先見性の行動についての説明を、誰にでもわかるような言葉で現わせるところまで洗練させるよう助言した。

3. タイトル「外回り看護師の手術侵襲が最小限になるための先見性に基づいた行動に関する研究」を、本研究の焦点を明瞭に表わす「外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づいた行動の構造化」に変更することを了承した。

4. 英文のアブストラクトの中に、本研究の重要な成果を表わす説明に用いた言葉が充分吟味されていないまま使われているところがある。たとえば、「生活体 (Living body)」「生命体 (Living existence)」「生活 (Life)」「生命 (Life)」など。点検して修正するよう求めた。日本語の要約も短縮するよう助言した。

5. 手術室看護師は、普段やっていることを言葉にすることができにくいという現状がある。研究者が行った参加観察やインタビューの中で手術看護過程は表現されたのか確認を行った。手術室看護師は自己完結的に一人で仕事をしており、自身でうまくいかなかったことを内省するという思考過程をとっており、自分がやっていることは当たり

前で、直観的にやっており、そのことを話さない状況があった。本研究の結果を受けて、手術室看護師が経験をどう語るか、よかったことを語る文化を手術室に作っていきたいと述べた。

6. 公表時の正確さを期すために、サイエンスペーパーの図等は白黒で現わすよう助言した。

論文審査結果の要旨

本研究は、外回り看護師が担当する患者に対して手術開始前から手術直後までの間に手術侵襲を最小限にするために行っている、先見性に基づく行動がどのようなものかを明らかにすることを目的としている。研究デザインは、シンボリック相互作用論を理論的前提とし、グランデッドセオリーの方法論を用いた理論生成の研究として計画されている。

手術看護についての研究がもともと少ない中で、外回り看護師の手術患者に対する先見性に基づく行動に注目し、その看護の構造を明らかにしたことが高く評価された。また、データ収集のプロセスでは、手術開始から終了までの参加観察とそのあとのインタビューをデータが飽和に至るまで行い、結果的に17名の看護師に対して手術室看護師が普段やっているがなかなか言葉にできない暗黙知を、丁寧に聞いていった力量が評価された。さらに、この論文は、日本の手術室看護師の看護の特徴がでていることから、広く世界に発信するために英文で出すこと、また外回り看護師が語った内容には看護の技能が含まれていることからそれをまとめること、参加観察とインタビューの方法をより具体的に示しデータ収集の方法論を提示することを助言し、この領域の研究者としての今後に期待した。

本研究で明らかにした外回り看護師が手術患者に対して先見性に基づく行動は、麻酔下の患者に成りかわって患者の生命の安全をまもり、生活者として患者を手術の開始から終了まで先手を打ったり見極めたりしながら見通し、手術場の物と間と人をコーディネートすることで術者や医療者を支えるというように、看護そのものであったことが明らかになった。これは看護の基礎教育や手術看護の専門性の確立、手術室看護師の看護アイデンティティの確立に貢献できるものと判断した。

以上により、本論文は看護学研究の発展を促す学術的価値をもつ博士論文として評価した。